

本田仁視さんを悼む

古賀 一男*・中溝 幸夫**

*名古屋大学・エコトピア科学研究所

**北九州市立大学・基盤教育センター

イングランドのダーラムは本田さんがサッカー研究の権威フィンドレイ教授のもとで1年を過ごされた所だ。1993年の夏、第7回ヨーロッパ眼球運動会議がダーラムで開催された。そのとき、本田さんは御家族と一緒に大きなバックパックを背中に会場に現れた。ご息がまだ小学生の頃だったと思う。そして、最後にお会いしたのは、2007年11月、東北大学の塩入さんの研究室だった。今年もまた同じメンバーの会合が予定されていたのにどうして本田さんだけがこんなに早く逝ってしまったのか…。

日本心理学会で眼球運動のワークショップを開こうと本田さんに相談したのはもう20年ほど前のことだ。以来、本田さんには、話題提供者・司会・指定討論者をかわるがわる毎回引き受けていただき、われわれ誰もが彼の物静かな話し方と最新の眼球運動研究の知識に影響されたものだ。

1999年、2001年の2回にわたってJSPSとSNSFの双方から資金援助を受け、スイスのベルンと奈良で日本・スイス2国間セミナーを開催した。本田さんはそのどちらにも参加され、国際的な研究交流にも貢献された。

本田さんの研究業績は、国内のみならず国際的にも広く知られている。眼球運動に関する研究を中心に知覚一般、認知科学、更に神経科学に関する知見を背景に数多くの業績を残された。Vision Research, P & P (現 APP), Experimental Brain Research, Perceptionなどの専門誌には、彼の原著論文が数多く掲載されている。著書も多く「眼球運動と空間定位」、「意識／無意識のサイエンス」、「視覚の謎」そしてフィンドレイ教授らの著書「アクティブ・ビジョン」の翻訳などが目の前にある。活発な研究活動は辞典やハンドブックの執筆にも示されており、「眼の事典」「脳科学大事典」「視覚情報処理ハンドブック」「新編 感覚・知覚・心理学ハンドブック」、「眼球運動の実験心理学」などがある。

こんなに国際的スケールで活躍された本田さんをあまりにも早く失ったことは、わが国における眼球運動・知覚研究の大きな損失であり、われわれはこれまでに経験したことがないほどの大きな衝撃と悲しみに襲われている。



(写真説明) 日本学術振興会 (JSPS) とスイス国立科学財団 (SNSF) の支援のもとに1999年5月スイス・ベルン郊外 Tune 湖畔で第1回の2国間セミナー (2回目は2001年9月に奈良) が開催された。本田さんはこの会合のコア・メンバーだった。